

2024.8.6. 2024山梨県教育研究所 公開研究会

ゆたかな学びを実現する教員の身振り とは？ 対話的空間の創造に向けて

孫 美幸

本日の概要

・はじめに

- 1 日本社会の子どもをめぐるデータ
- 2 子どもの生活世界からみる「ゆたかな学び」
- 3 「ゆたかな学び」を支える大人たちの学び
- 4 教員へのインタビューからのヒント

・おわりに

暮らしのなかの多文化共生

境界に 生きる

孫美幸

Sohn Mihaeng



ひいおじいちゃんの世代から日本へ。
お父さんは日本京都生まれ京都育ち。
お母さんは韓国プサン生まれプサン育ち。
国籍は、韓国です。
2000年に京都市の公立中学校ではじめての外国籍の先生になりました。

多文化背景をもち研究に携わる著者が、平和、多文化共生、自然環境などは根幹でつながるとの実感を深めつつ、多様な立場の人びとが暮らしやすい、より寛容な社会への手がかりとなる、自らの暮らしのでき事を綴ったエッセイ。



孫美幸

Sohn Mihaeng

ともに
生きやすい
社会って？

わが家の
「師匠」たちと学ぶ

解放出版社

1 日本社会の子どもたちをめぐるデータ

参照: 日本財団のInstagramより

https://www.instagram.com/nippon_foundation/

100人の小学生のうち14人は、経済的な困難を抱えています。毎日の衣食住に困難を抱えている子どもも少なくありません。友達と遊べない、旅行に行けないなど、経験や体験が乏しくなる場合もあります。

////////////////////////////////////

2021年度の要保護率及び準要保護児童生徒数(小中あわせて)は129万8315人。就学援助率は14.22%でした。

////////////////////////////////////

<参考>

日本財団『子どもの居場所の全国展開に向けた提言書』(2022年4月)

<出所>

文部科学省『令和4年度就学援助実施状況等調査(児童数は令和3年度)』

100人の小学生のうち8人が、いじめに関する問題を抱えています。

////////////////////////////////////

小学校におけるいじめの認知件数は50万562件(2021年度)で過去最多

////////////////////////////////////

100人の小学生のうち「1.3人」は、不登校により通学をしていません。不登校の小学生は8万1,498人で、10年前の3.6倍に増えています。(2021年度)不登校は長期化しており、半数近くの児童が、年間90日以上欠席しています。

<参考>

日本財団『子どもの居場所の全国展開に向けた提言書』(2022年4月)

<出所>

文部科学省『令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』
分母となる小学校児童数は、文部科学省『学校基本調査(令和3年度速報値)』

日本財団が行った6カ国調査(対象は日米英中韓印の17歳～19歳)で見えてきた日本と世界の若者の特徴。

質問は「国や社会を変えられるかについて」です。

「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と答えた割合。インドが最も多く78.9%で、中国70.9%、韓国61.5%、アメリカ58.5%、イギリス50.6%と続きます。










一方、日本で「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と答えた割合は、わずか26.9%と6カ国中最下位でした。

日本の若者の多くは社会に対し、「自分が行動してもどうせ社会は変わらない」という無力や虚無感を感じているのではないかと思われれます。

日本財団「18歳意識調査」

https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/eighteen_survey

10のファクト

-  **4人に1人**
が「本気で自殺したいと考えたことがある」
-  **自殺未遂経験者は6.2%**
-  **自殺念慮、自殺未遂ともに15～20代のリスクが高い。**
自殺念慮・自殺未遂のリスクが高い層
 - 在職（休職中）
無職（求職中）
 - 周囲で自殺で亡くなった方がいる
 - 持病
心の病気
 - 家族等に助けや助言を求める相手がいない
 - 疎外感や孤立感を感じている
-  **1年以内に自殺念慮があった層のコロナ禍におけるストレス**
 - 精神的健康問題（うつ病など）の症状悪化
 - 同居する家族から感情的な暴言を吐かれること
 - 経済的に苦しく、家賃や光熱水費、食費などの生活費が工面できないこと
 - 就職／転職活動が困難であること
 - 睡眠が十分とれていないこと
-  **4人に1人**
が周りの人を自殺で亡くした経験がある
-  **7割**が自殺を考えた時に誰にも相談していない
-  自殺念慮や自殺未遂経験がある層は、家族に助言を求める割合が低い。
-  **自殺を思いとどまる理由は「家族や恋人が悲しむことを考えて」「我慢して」**
-  **若い年代は自殺に関する報道に影響を受けやすい傾向**

【日本の教員の意識】

教員のブラック労働の結果、教員としてのスキルをあげる機会の損失や十分な授業準備時間を確保できないという状況が起きており、参加国平均と比較して**日本の教員の自己効力感**は**とても低く**なっています。

また**半数近く**の教員が、「**もう一度仕事を選べるとしても、教員になりたくない**」と答えており、早急な改善が求められます。

OECD『図表でみる教育 2018年版』

国立教育政策研究所『我が国の教員の現状と課題 – TALIS 2018結果より –』

https://www.nier.go.jp/kokusai/talis/pdf/talis2018_points.pdf

文部科学省『OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018報告書 vol.2 のポイント』

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/_icsFiles/afieldfile/2020/20200323_mxt_kouhou02_1349189_vol2.pdf

OECD『TALIS2018』

https://www.oecd.org/education/talis/TALIS2018_CN_JPN_Vol_II_extended_jpn.pdf

2 子どもの生活世界からみる「ゆたかな学び」

・小学校の校庭と裏山の間にあった桑の木

【大人たちの事情】

学校・校庭整備、木の問題、予算、危険性。

【子どもの目線】

「給食だけだとお腹がへっちゃう」

「早く食べないといけない」

「桑の実を食べたり、花の蜜を吸っていた」

「先生たちが(木を)切っちゃった・・・」

「理由はわからない」

「もう生えてこない・・・」



【子どもたちにとっての「ゆたかな学び」って？】

「給食だけだとお腹がへっちゃう」「早く食べないといけない」

→学校にいる間の食のあり方は？

いのちを支えるものに時間を割けている？

トイレに行く時間は？スケジュールの余白は？

「桑の実を食べたり、花の蜜を吸っていた」

→食べられる自然のものやいのちの豊かさを自分と自然、友人、地域の大人たちとの関係の中で日々学んでいる子どもたち。

「蝶々より早く蜜を吸いに行く」「サワガニは雨の日に外へ出てくるから友人と待っている」

→幼少期の信頼関係、レッテルを張らない関係へ。

属性ではないその人そのものを見ること。

「先生たちが(木を)切っちゃった・・・」「理由はわからない」

「もう生えてこない・・・」

→子どもたちへのアナウンスの仕方、子どもたちの意見は？

【鷲田清一(2010)『新編普通をだれも教えてくれない』筑摩書房

「子どもが窒息しないように 2007春」266～269頁】

「育てる」より、「育つ」という自動詞のほうが抵抗が少ない。子育てや教育は、ふり返ってふと「ああ、育ったあ」と言えるときが、いちばんうまく行ったときではないかとおもう。「親はなくとも子は育つ」という言葉があるが、子どもが自然に育つ、勝手に育つというのが、いちばんいい子育て、教育のあり方ではないかとおもう。

現代の社会には、そういう「自然に育つ」場所がほんとうに少ない。「自然に育つ」というのは、無視する、放置しておくということではない。そこにいたら子どもが勝手に育つような「場」がしっかりあるということである。

よその子どもたちを見て見ぬふりをする大人たちが、かつての地域にはたくさんいた。いまは、ちゃんと見ないで、見たようなことを言うひとが多すぎる。また、家庭には鉄の扉、学校には鉄の門と、「育て」の場所が地域から切り離されている。直接の関係のない大人たちの眼の届かないところで、子どもは育てられる。凶悪事件があると「安全」に過剰なまでに気を遣い、「監視」をいっそう嚴重にする。そして「育て」の場所はますます閉鎖されてゆく。

大人たちにそんなふうに見られるのではなく、ちょっと距離を置いたところから見て、しかも見ぬふりをする大人にまじって自然に育つ、そんな開けた場所が、いまの子どもには必要ではないかとおもう。

それに、子どもには大人がちゃんと壁になることが必要だ。そういうかたくなな定点からの偏差を意識することで、じぶんがどういう人間であるかをおぼろげながらもわきまえてゆく。そういう壁になるために、近所のおっちゃん、おばちゃんの一員としての「役」を引き受けること、つまり、隔たってはいるが見て見ぬふりをするたしかな【ワン・オブ・ゼム】になることが、いまの大人には求められている。

たがいにぜんぶを引き受けあうといった煮つまった関係のなかでは、「期待」が過剰になって、子どもたちは窒息してしまうから。けれども、壁がなくては子どもたちはじぶんを築きようがないから。

経験してきたさまざまな違和感 マイクロアグレッションにさらされる

- ・名前をからかわれる。
- ・給食が食べられない。
- ・大人に対する態度。
- ・家族観のちがい。
- ・国籍、ビザ、言語、アイデンティティ、多様で複雑なことへの理解。
- ・自分のルートの国の文化や言語に対する考え。

2世、3世の子どもがケアラーに 日本語支援のその先へ

- ・家族の公的な書類、業者への連絡、学校のプリントなど、翻訳や通訳、実質的な交渉を担う。
- ・学費はアルバイト代で。
- ・完全に孤立する。
- ・支援の対象外の年齢になった時、どこに頼れるか。
- ・進学をあきらめる。
- ・地域をこえて大人が連携できるか。

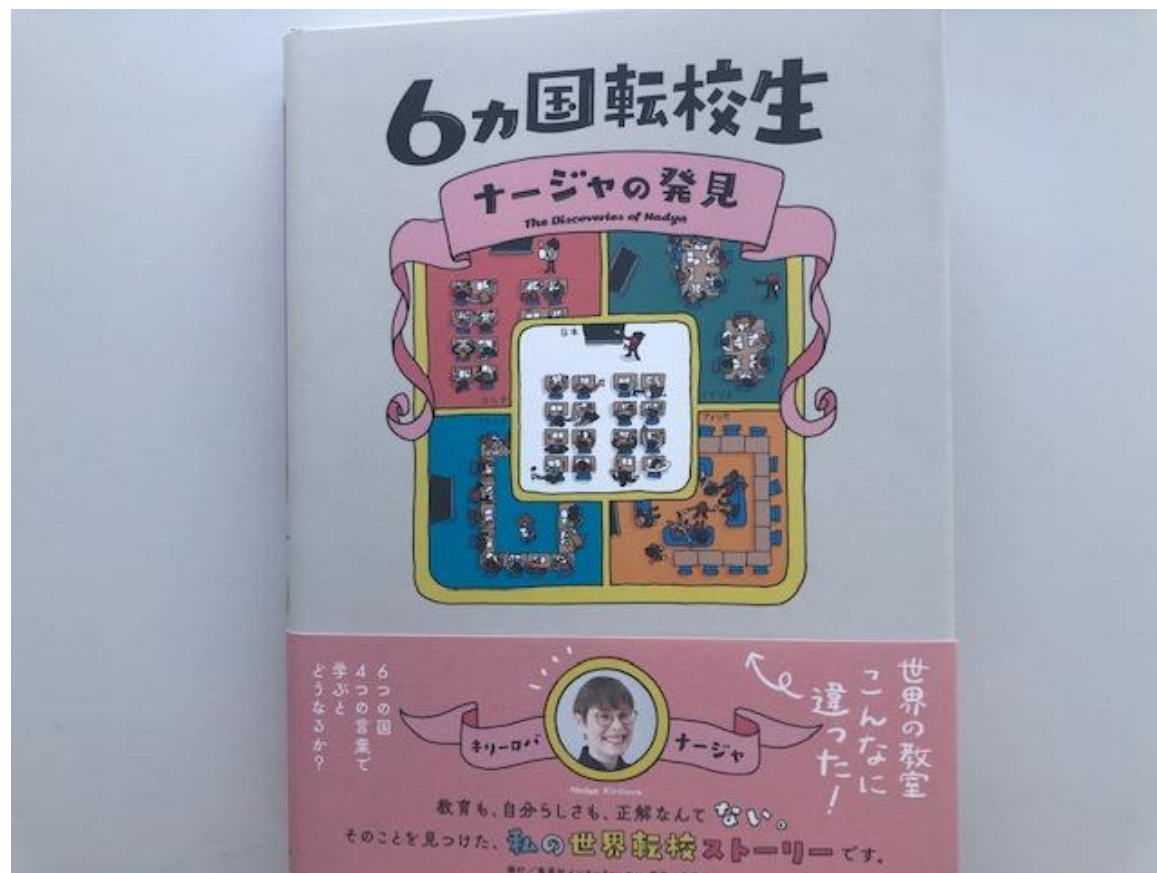
3 「ゆたかな学び」を支える大人たちの学び

人権学習担当の先生とのやりとりより

「人権教育というのは、係任せな部分があって、各校まちまちであると思います。若い先生にとっては、自分が学生のころに受けてきた人権学習のイメージしかありません。ほとんどやったことがない、覚えていない先生が、大半であるように思います」

教員も、ゲストスピーカーも、授業で話すことで消耗していくのではなく、出会いを通してお互いにエンパワーされるような学びの機会の創出がより一層求められることを実感している。

世界的に見ると…
私のあたり
まえは？



参考 : Nord-Labo 北欧研究室 <https://youtu.be/iUdjRuR7z38>

4 教員へのインタビューからのヒント

・筆者とラポールをすでに築けている20年以上のベテラン教員で、マイノリティの子どもたちとの共生にむけた優れた実践を積み重ね、組織の中での動き方などが秀でている3名に、どのように「観立てる力」を体得し、それを「ゆたかな学び」を創造する教育実践や学校現場で活かしているのか、半構造化インタビューを実施した。

・「観立てる(みたてる)力」

経験則、原則、学ぶ中で得た多様な知識を総合させて、上手い匙加減で先を読み判断する力。

・教員が全員「〇〇力」を鍛えれば、教育をめぐるさまざまな問題が解決するといった表層的で安易な提起ではない。大人も子どもも知識に偏らず、直観やさまざまな感覚を総合的に動員して判断し、一人ひとりがもっている潜在力を発揮していくこと。そして、そのような立体的に物事を見定める姿勢を、自然と伝え学んでいくことが現代社会では難しくなっている。教員の具体的なライフヒストリーと「観立てる力」に関わる内容を確認することを通して、私たち一人ひとりの学びの姿勢や身振りを逆照射することを試みたい。

① 自分の中で信じられる感覚を温める時間をもち、いくつもの時間と空間の境界を往還する

3人の教員には自分自身の身体感覚をそれぞれの得意なやり方、好きなやり方で育み温める経験を積んできていた。また、それぞれの方法で学校という場を複数の視点から見ることができていた。そして、それが「観立てる力」を活かす基本的な身体性ともつながっていた。

②各教員の良い「加減」を体現し、若手教員を見守り一歩ひいて関わり成長を待つ

3人の教員はいい意味で仕事の力みがとれた瞬間がそれぞれにあり、それが若手教員を一歩ひいて見守り関わる、そして成長を待つゆとりのある姿勢につながっていた。

・3人の教員は、幼少期から自然豊かな中で五感を鍛えていた経験があり、身体感覚も豊かであった。そして、それらの蓄積を活かして、**教員になってからもそれぞれの身体を気負いなく開いていく経験や方法をもっていた。複数の立場で創造力やヴィジョンを育むような体験を日常的にしており、それが学校という場所を多彩な視点から見つめられることにもつながっていた。**このような基本的な身体感覚と日常的な経験が、いろいろな感覚を駆使して立体的に先を見通す「観立てる力」となり、学校現場で必要な共生にむけた取り組みや場の創造にも影響していた。

・対話的空間を創造していくには、ベテラン教員と若手教員との関係性や学びのあり方が重要になってくるが、その点についても若手教員に対して一歩ひいて待つ姿勢がそれぞれにあった。日常的に行っている自己内対話や複数の視点の物語の中で生きていくことが、若手教員が動きやすいように先を「観立てて」動いていく仕事の具体的な整理や下準備にもつながっていた。

・今後は、このような「観立てる力」を具体的に育む経験を教員が蓄積できるような感覚を磨くこと、そのような時間的余裕が必要になってくるであろう。それには制度的な改革はもちろん必要であるが、日々の教育現場の少しの工夫でできることも、本論で取り上げた教員たちの実践のように多くある。その小さな積み重ねが、多くの教員が学校にゆるやかな空間と時間を生み出す「ゆたかな学び」を生み出す身振りへとつながる窓口となっていけばと願う。

共苦の次元にあることと共生への身振り

学校で働く教員も、学校内だけではなく、地域に出て身体まるごと学ぶ経験を経る。「共苦」の次元に立つ前提として、「身体を気負いなく他者にひらく」、そのような過程を積み重ねて豊かな感覚を醸成することがまず必要ではないだろうか。

その上で、共生にむけた多様な実践を創造できる、先を読んで判断する「観立てる力」を、アートや歌、詩のような形で創出し、多面的にマイノリティの立つ場所を体感しながら、育むことができるのではないだろうか。

こことはちがう世界を知ること

・鷺田清一(2019)

《集団からのけ者になるたび、こことはちがう世界を知っていることがひそかな救いであった。》

西川祐子さんは近著『古都の占領』のなかで、家庭内の事情、それに占領期の政情に翻弄されるかのように、祖父母に預けられた京都と両親のいる岡山のあいだで何度も転校を余儀なくされた小中学生時代をふり返り、そう書いている。

「こことはちがう世界を知っていること」が、苦境のさなかにある人をかろうじて支えるというのはよくあることである。

病気、事故、被災、失職、事業の行きづまり、大事な人の死……。そういう思いがけない出来事に遭遇するたび、ひとは人生の語りなおしを迫られる。それまで人生の前提となっていたものが崩れるからだ。

人生の語りなおしとは、別の言葉でいえば、希望の書き換えでもある。じぶんが生きるうえで軸とするものを、これまでとは少し違うものに移し変えるということである。

そのとき必要になるのが新たな学びである。これまで考えもしなかったが、世の中にはこんな問いもある、世界にはじぶんが知らない領域が想像をはるかに超えて広がっている……。それを知ることが、じぶんが生きるべき世界を拓ける。ふんづまりになっていたじぶんを助けるのである。生き延びるために、学びはそれほど大切なのである。

鷲田清一(2019)「選択と分散」『濃霧の中の方向感覚』晶文社pp.249-251